

文部科学省小学校外国語科移行教材『We can!』にみる 英語読み聞かせ教材の構成要件の分析 — 青森県版小学校英語読み聞かせ教材の開発を目指して —

丹藤 永也[※]

1. はじめに

2017年3月に次期学習指導要領が告示され、2020年度から小学校の中学年で領域としての外国語活動が、高学年で教科としての外国語科が設定され、小学校3年生から英語が指導されることになった。外国語活動は年間35時間、外国語科は年間70時間実施される。今回の改訂の大きな特徴は、高学年で英語が初めて教科となり、読んだり書いたりする文字指導が導入されることと、他教科と同じように数値による評価が付けられることである。現行の学習指導要領では、高学年を対象として外国語活動が年間35時間実施されているが、教科ではなく領域であるため、評価は数値ではなく観点別に文章によって記述されている。また、現行の外国語活動では「聞く」「話す」という音声中心の指導だが、次期学習指導要領では、中学年の外国語活動で音声に慣れ親しんだ簡単な語句や表現を、高学年で読んだり書いたりする文字を使った活動に取り組み、4技能の能力を総合的に育成することになる。ただ、この文字指導は、中学校のようにドリルをして覚えさせるようなことはせず、児童の興味関心を高め、自然に文字に慣れ親しんでいく指導法が求められていることに留意しなければならない。

そこで本研究では、文字指導の一環として、これまでも早期英語教育で多く取り入れられてきた指導法である絵本の読み聞かせに注目した。読み聞かせはストーリーテリングと呼ばれ、文字と音声による英語のインプットと、子どもの

興味関心を引くような絵という視覚的補助介在によって意味理解を促し、楽しみながら自然に英語の音と文字の結びつきや英語独特のリズムに気づかせることができるというメリットがある。樋口・加賀田・泉・衣笠 (2013) も、絵本を活用するメリットとして、ある程度まとまりのある英語を聞くことを通して、英語特有の音、リズム、抑揚等に触れることができ、英語の文法構造にも無意識のレベルで触れることができる点、イラストと理解可能なことばをヒントに前後関係等から、未知の表現や語彙の意味を類推し推測する力や大意をつかむ力を育てる点、日本の絵本で扱われないモチーフやイラストを通して異文化に触れ、異文化への興味関心が高まる点、音と文字のつながりへの興味関心が高まる点を挙げている。また、読み聞かせをしながら教師は児童に英語で問いかけをしてインタラク션을図ることができる点も大きなメリットである。これによって自然にコミュニケーション能力、特に即興でやり取りをする能力を育てることができる。このように、読み聞かせは小学校英語の目標を達成するために大変有効な指導法であると言える。

文部科学省は2011年度に現行の外国語活動を全面実施して以来、2020年度版学習指導要領において中学年で外国語活動の導入、高学年での外国語教育の教科化を図るために、必要となる補助教材を作成し検証を試みている。それらは、次期学習指導要領で中学年に新設される外国語活動を想定した、3年生用の「In the Autumn Forest」、4年生用の「Good morning」という2つの

※ 青森公立大学准教授

絵本教材と、3, 4年生用のデジタル教材「Hi, friends! Story Books」である。それから、高学年では教科化を目指し、現行の外国語活動で5, 6学年対象に使用されている本教材である『Hi, friends!』の補助教材として『Hi, friends! Plus』が作成された。この『Hi, friends! Plus』は、「聞く」「話す」活動に加え、基本的な表現による「読む」「書く」力の育成を含めたコミュニケーション能力の基礎を養うことを目的に、映像や音声を活用した「アルファベット文字の認識」「日本語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付き」「語順の違いなど文構造への気付き」の指導に必要な要素を含む新たな教材である。さらに、「This is ME!」「A letter to …」という2つの絵本教材も掲載されている。これらの補助教材は2015年度から2年間「英語教育強化地域拠点事業」の研究開発学校及び教育課程研究開発学校等で活用され、検証された。

そして、2017年3月の次期学習指導要領の告示を受け、文部科学省は2018年度からの2年間の移行期間に使用する教材を作成した。これらは上述の補助教材の検証結果を反映させて作成されたもので、3年生用が『Let's try! 1』、4年生用が『Let's try! 2』、5年生用が『We can! 1』、6年生用が『We can! 2』となっている。そして、これらにも絵本教材が採用されている。『Let's try!』には絵本を活用した単元が各学年1つずつ、『We can!』にもSTORY TIMEという読み聞かせ教材が各単元に1つずつ掲載されており、次期学習指導要領においても、読み聞かせは中心的な指導法の1つであると認識できる。このSTORY TIMEは絵と文により構成された絵本型教材で、各単元の最後のページに設定されており、5分から10分程度の時間をかけて指導することになっている。導入されたねらいとしては、指導者の読み聞かせを通して、英語の自然な音声を繰り返し聞き英語のリズムやイントネーションに触れさせること、絵を手掛かりにまとまりのある話の内容を推測すること、文字と結びつけたり、単語や文、語順などの認識を深めたりすること等が挙げられている。

このように、小学校英語における読み聞かせ教材の重要性は高まっているが、次期学習指導

要領は告示されたばかりであるため、その趣旨を踏まえた教材はまだ開発されていないのが現状である。指導の充実を図るには豊富な教材が必要であるが、市販の絵本の場合、使用されている語彙や表現が難しく使いにくいものが多いため、次期学習指導要領の趣旨に沿った読み聞かせ教材の開発は急務であると言える。そこで本研究では、『We can!』のSTORY TIMEを分析してその構成要件を明らかにし、それをもとに青森県版の英語読み聞かせ教材のパイロット版を開発する。

本研究で開発する教材は地域の題材をトピックとして扱った地域教材であるが、そのメリットについて、吉田(2006)は中学生を対象に埼玉県 の地域題材を教材化した取り組みを紹介し、地域教材は英語の学修意欲を高めること、課題解決のための自主的な活動を促すこと、英語の表現力を高めることに有効であることを明らかにしている。また、Yonaha(2007)は地域教材を導入する意義をアイデンティティの確立とオーセンティシティの保証であるとしている。本教材では児童にとっては身近でなじみのあるものが題材として取り上げられているため、親近感をもって学習に臨むことができ、青森について学ぶことを通してふるさとを愛する心情を涵養することができると考えている。また、教師の読み聞かせの中でインタラク션을図り、児童に自分の意見や考えを話させたりすることもできる。よく知っている題材については、自信をもって発表することができるため、ALT等の外国人に青森を紹介するアウトプットの活動まで広げることができる。教師とのやり取りやスピーチの活動は、まさに次期学習指導要領の「話すこと[やり取り][発表]」で具体的に目標が掲げられている領域であり、本教材は、英語を聞くことから始め、英語を読んだり話したりする活動まで行うことができる技能統合型の教材であると言える。

以上のように、本研究の目的は、次期学習指導要領の趣旨に沿った青森県版小学校英語読み聞かせ教材を開発するために、移行教材『We can!』のSTORY TIMEを分析して小学校英語における読み聞かせ教材の構成要件を明らかにし、その構

成要件をもとにパイロット版の教材を開発することである。

数はどのようになっているのか。
(3)STORY TIMEでは読み聞かせ教材としてどのような工夫がなされているのか。

2. リサーチクエスト (RQ)

本研究では、STORY TIMEの構成要件を明らかにするために、次の3つのリサーチクエストを設定した。

- (1)STORY TIMEではどのようなトピックや絵及び英文が採用されているのか。
- (2)STORY TIMEで使用されている単語や文の

3. 『We can!』 STORY TIMEの分析

3.1 トピックと絵及び英文について

表1と表2は、『We can! 1』と『We can! 2』のSTORY TIMEのトピックと絵及び英文についてまとめたものである。

表1 『We can! 1』 STORY TIMEのトピックと絵及び英文

Unit	トピック	絵
1	カズが自己紹介をしている場面。	中心にカズの顔があって、周りに犬、猫、教科書、サッカーボール等の絵がある。
	Hi, my name is Kazu. I like cats and dogs. I like soccer and baseball.	
2	カズの自己紹介とマリアが転校してきた場面。	カズが、先生が黒板の前に立って転校してきたマリアを紹介している場面を思い出している絵。
	M: Hi, everyone! K: I'm eleven years old. My birthday is April 8th. It's a special day today. We have a new student.	
3	マリアが日本語を教えてくれるように頼んでいる場面。	マリアとカズが隣同士で座っている絵が2枚。下はカズが教科書を見せている。
	M: Hello. It's Monday today. Our first class is Japanese. M: Can you teach me Japanese? K: Sure!	
4	マリアがカズに教科書を見せてくれるように頼んでいる場面。	マリアとカズが隣同士で座っている絵が2枚。下はカズが教科書を見せている。
	M: Do you have your math textbook? K: Yes, I do. Here you are. M: Thank you, Kazu.	

Unit	トピック	絵
5	カズとマリアが算数を勉強している場面。カズがマリアに算数が好きか質問している。	マリアとカズが隣同士で座っている絵が2枚。下は2人が会話をしている絵。
	K: Do you like math? M: Yes. I like math very much. Maria can do math very much.	
6	4人の班での昼食中マリアが友達に兄の話をしている場面。	4人で昼食を食べている絵とマリアが話をしている絵。
	At lunch time ... M: I have a brother. He is a junior high school student. We sometimes play soccer together.	
7	学校帰りに町の掲示板の地図を見て道を説明している場面。	3人で地図を見ている絵と地図のアップの絵。
	On our way home... M: Where is the park? K: Go straight and turn right. We can teach Maria about our town. 地図中の単語: TOWN MAP, STATION, FIRE STATION, HOSPITAL, POST OFFICE, MIDORI ELEMENTARY SCHOOL, PARK	
8	放課後マリアとマリアの兄がカズとサッカーをしている場面。	マリアがカズをサッカーに誘う絵と一緒にサッカーをしている絵。
	Later in the afternoon... M: Hi, Kazu! Let's play soccer together. We have a great time, but...	
9	マリアがカズに日本語を覚えてくれたお礼を言う場面。	カズがマリアに日本語を教えている絵とマリアがカズにお礼を言っている絵。
	I can teach Maria Japanese. M: Thank you, Kazu. K: You're welcome, Maria. I want to speak English more. We are good friends.	

※ K : Kazu M : Maria

表2 『We can! 2』 STORY TIMEのトピックと絵及び英文

Unit	トピック	絵
1	カズが自分の部屋にいてペットの話をしている場面。	場所はカズの部屋でカズは椅子に座っている。机には文房具や本、部屋にはコート掛け、壁にはカレンダーある。
	I like cats. We have a cat. His name is Pat. Where is he? He is in the hat. Pat, the cat, is in the hat.	
2	外国人の観光客が土産屋で買い物をしている場面。	外国人と店主が会話をしている絵。いくつか他の店先の様子や犬、猫も描かれている。
	T: Oh, this is a nice kabuki pen. I love kabuki. How much is it? S: Ninety yen. T: May I have ten? S: Sure. Nine hundred yen for ten pens.	
3	カズが自分の好きなラグビー選手の話をしている場面。	カズがラグビーの試合をテレビで見ている絵。好きな選手がプレーをしている。
	K: I like to watch rugby. It's fun. I like Kenji. He can run fast. He can jump high. He can play in the sun and the rain. Run, jump and have fun in the sun.	
4	カズが犬と公園の池の周りを走っている場面。	カズが犬と公園の池の周りを走っている絵。丸太の上に蛙がいる。池には蛙やオタマジャクシが見える。
	We have a pond in our town. Frogs live in the pond. I can see a big frog on a log. I usually jog with my dog around the pond. A big frog on a log and a jogging dog.	
5	カズが夏休みに家族と海に行ったことを思い出している場面。	カズが海辺で貝を捕ったり、家族が楽しく食事をしたりしている絵。砂浜にはヒトデがいる。海にはクラゲが浮かんでいる。
	My family went to the sea this summer. I saw some sea shells, starfish and jellyfish. We had a nice dish of fish. It was delicious. A delicious dish of fish.	

Unit	トピック	絵
6	カズが友達と水泳の試合をテレビで見ている場面。	カズが友達と水泳の試合を見ている絵。テレビには好きな選手が映っている。
	I want to watch a swimming race. It's exciting! Look! I can see my favorite high school swimmer. He is near the pool. He is so cool! The cool high school swimmer is near the pool.	
7	修学旅行で有名な観光地である神社を訪れている場面。	鳥居の前でカズとマリアが会話をしている絵。神社の階段には行列ができています。他の児童の様子も描かれています。
	K: Wow, a long line! M: People want to see the nine pines at the shrine. K: The famous nine pines? M: Yes. We have time. Let's get in the line. The famous nine pines at the shrine.	
8	カズが将来パン職人になりたいという夢を語っている場面。	カズがパン職人になりケーキを作っている様子を想像している。ケーキやシェイク、証明書の絵もある。
	My father is a baker. I want to be a baker, too. I want to bake bread. I want to make cakes. You can enjoy shakes at my shop, too. Bake bread and make cakes and shakes.	
9	カズたちが中学校の校庭で野球部の練習を見学している場面。	中学校の校庭で野球部が練習をしていて、カズたちがそれを見学している絵。
	They are all tall. We are all small. They are all good. We can be good, too. Ball, ball, ball, let's play ball. Tall and small players, all playing ball.	

※ T : tourist S : shopkeeper K : Kazu M: Maria

トピックの特徴として、児童の身近な場面が取り上げられていることがわかるが、これは次期学習指導要領の「言語の使用場面例」に示されている「児童の身近な暮らしに関わる場面（家庭での生活、学校での学習や活動、地域の行事など）や特有の表現がよく使われる場面（挨拶、自己紹介、買物、食事、道案内、旅行など）」によるものと思われる。『We can! 1』は特に学校生活が場面の中心で自己紹介や下校途中、放課後の様子が描かれているが、『We can! 2』では場面が家庭や地域に広がり、最後には中学校への接続を意識した内容になっている。

絵は、1 ページの中に1 枚絵の場合や時系列で2 枚の絵、文字で表された以外の情報を持つ絵などが意図的に盛り込まれ、教師がインタラクションで活用できるように工夫されている。

絵本のように複数ページで構成されストーリーが展開されるものではない点が特徴であると言える。また内容も、絵の登場人物に感情移入できるような工夫が凝らされた場面設定になっているため、児童に説明をしたり問いを投げかけたりして、豊かなインタラクションが図れるようになっている。

3.2 単語数と文数について（RQ2）

表3は、『We can!』の総語数である。ここでは、Kazu等の名前、kabuki等の日本語を英語表記したものも1単語として数えている。それは、文字指導が始まったばかりで、英語表記のものを読むのには負担があると思われるからである。またcatとcatsのような単数形と複数形、It's等の短縮形はそれぞれ1語としている。

表3 『We can!』の総語数

Unit	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計	平均
We can! 1	15	22	15	15	16	19	34	16	21	173	19.2
We can! 2	27	29	35	40	30	36	34	38	30	299	33.2

『We can! 1』では、STORY TIME 1 話分の語数が15語から34語で平均19.2語、『We can! 2』では27語から40語で平均33.2語となっている。『We can! 1』と『We can! 2』を比較すると約1.7倍となっており、発達段階に応じて単語数を増やし、難易度を上げているものと考ええる。

表4は、『We can!』の総語数（token）と異なり語数（type）及びTTR（Type-Token Ratio）で

ある。TTRとは、総語数における異なり語の割合を示す指標であるが、ここでは、総語数が少ないことから、異なり語数／総語数の式を採用している。例えば、総語数が50語、異なり語数が25語だとすると、式は $25/50$ となって $TTR=0.5$ となる。これは2語に1回の割合で異なる単語が出現するという意味である。

表4 『We can!』の総語数と異なり語数及びTTR

	総語数	異なり語数	TTR
We can! 1	173	97	0.56
We can! 2	299	130	0.43
We can全体	472	195	0.41

TTRを見ると、『We can! 1』では0.56、『We can! 2』では0.43であった。『We can!』全体ではTTRは0.41となっており、繰り返し出現する単語が多いことから児童にとって内容理解はそれほど難しくないものと思われる。

表5は、『We can!』のユニット毎の文数である。At lunch timeやOn our way homeのように、会話以外の副詞句だけの表現は文として数えていない。

表5 『We can!』のユニット毎の文数

Unit	1	2	3	4	5	6	7	8	9	平均
We can! 1	3	5	5	4	4	3	3	3	5	3.9
We can! 2	6	7	7	5	5	7	7	6	6	6.2

これらからわかるように、『We can! 1』では1話分の文数が3文から5文で平均3.9文となっているのに対し、『We can! 2』では5文から7文で平均6.2文となっている。『We can! 1』と『We can! 2』を比較すると、約1.6倍となっている。これまでの文部科学省が示した絵本教材と

比較した場合、1ページあたりの語数及び文数が多くなっており、これがSTORY TIMEの大きな特徴の1つであると言える。視覚的な文字のインプットという重要な役割も果たしているということがわかる。

表6は1文あたりの語数である。

表6 『We can!』の1文あたりの語数

Unit	1	2	3	4	5	6	7	8	9	平均
We can! 1	5.0	4.2	3.0	3.8	4.0	5.3	5.3	4.0	4.2	4.3
We can! 2	4.3	3.9	5.0	8.0	6.0	5.1	4.9	6.2	5.0	5.3

表6からわかるように、『We can! 1』では1文あたりの語数が4.3、『We can! 2』では5.3となっており、1文あたり1語増えていることがわかる。1文あたりの語数がそれほど多くないのは、小学校では複雑な文構造の文を採用していないことによるものと考ええる。

リーになるという仕掛けが施されている。一方『We can! 2』のSTORY TIMEは一話完結であるが、話の中に韻を踏む単語を意図的に配置するなど、文字と発音の関係や面白さに気付かせるような工夫が見られる。

3.4 総合考察

これらのことから総合的に判断して、STORY TIMEの構成要件を7つの観点から表7のようにまとめる。

3.3 読み聞かせ教材としての工夫（RQ3）

STORY TIMEにおける工夫だが、『We can! 1』では各単元の内容がつながっていて、9単元分のSTORY TIMEをつなぎ合わせると1つのストー

表7 STORY TIMEの構成要件

項 目	内 容
絵	1枚絵とし、その中にインタラクショナルができるように情報を盛り込む。
登場人物	児童が感情移入できる同年代の男女の子どもを複数人登場させる。
トピック	児童の学校や日常生活に身近で興味を持ちやすいトピックとする。
単語数	学年間で差はあるが、20語から40語程度とする。
TTR	0.5程度とする。
文数	学年間で差はあるが、4文から8文程度とする。
表現	英語特有のリズムやイントネーション、韻等、工夫をする。

4. モデル教材について

4.1 モデル教材の英文

表7の構成要件をもとに、モデル教材を作成する。文字への慣れ親しみの程度を考慮して対象は6年生とし、10月に使用する教材とする。10月ということからトピックは「実りの秋」とし、青森の児童にとって認知度の高い食材を4つ取り上げる。まずはつがる市の米を紹介する。つがる市は岩木川沿いに発達した津軽平野の中心に位置するため、全国的な米所として有名である。近年、青森県では青天の霹靂という新品種を開発し、2015年より本格販売しており、青森県初の特Aを獲得している。次に弘前のりんごだが、農林水産省の「作況調査（果樹）」によると、2017年産の全国収穫量の57%を青森県が占め全国1位となっており、弘前市はその中心的な産地である。弘前の小学校ではりんごの種類を紹介する下敷きを配布する等、既に地域教材としても活用されており、青森を代表する農産物である。3つめは「嶽きみ」である。弘前市の岩木山麓にある嶽高原で栽培されているとうもろこしを「嶽きみ」と言う。「きみ」とは津軽弁でとうもろこしのことを指す。「嶽きみ」は他のとうもろこしに比べとうもろこし自体の糖度が高く18度以上にもなり、生でも食べられる甘さを持ったとうもろこしブランドである。2007年4月には特許庁の地域団体商標として認定されている。4つめは「八戸の前沖さば」である。「八戸前沖さば」とは、八戸前沖さばブランド協議

会が認定した期間に八戸前沖で漁獲し、八戸港に水揚げされたさばのことで、この認定期間は、水揚げ状況や身に含まれる脂肪分、魚体の重量などを参考に毎年判断され、脂肪分はおおむね15%以上のものを言う。この八戸前沖さばブランド協議会は、八戸前沖で漁獲されるサバの優位性に着目し、新たな観光誘客を図る食ブランドを創造するために平成20年7月に設立された団体である。

これらを題材にして、次のような教材文を作成した。

Harvest in Aomori

In fall,
Tsugaru is gold.
We can eat delicious rice.
In fall,
Hirosaki is red.
We can eat delicious apples.
In fall,
Mt. Iwaki is yellow.
We can eat delicious sweet corns.
In fall,
Hachinohe is silver.
We can eat delicious mackerel.
Fall in Aomori is the harvest time.
Fall in Aomori is the perfect time.

このHarvest in Aomoriの詳細について記述する。まず単語についてだが、総語数が56語、異なり語数が26語、TTRは0.46である。語数と文数は『We can!』の平均に比べ少し多いが、TTRは同程度あり、また異なり語数の中にはよく知っている地名や食材、既習の色の表現、can eatという動詞句が使用されており、絵という補助教材の効果もあって、理解は難しくないと考える。さらに、最後の2文が発展的なレベルの文として設定されており、本題材が長く難しいと指導者が判断した場合、割愛して指導することができる。この2文を省略すると、総語数が42語、異なり語数が21語、TTRは0.5となり、よりSTORY TIMEの構成要件に合った形となる。英文の特徴としては、どの連もIn fallから始まること、2文目が都市や場所とそれを象徴する色でまとめていること、3文目がWe can eat〜で始まることから、同じ表現が繰り返し使用されるようになっており、英語のリズムを重視している。さらに最後の発展の表現も、harvestとprefectが韻を踏むように工夫されている。

地域教材のメリットとしては、児童になじみのある内容であることから児童の学習意欲を高め、自分の気持ちや考えを持たせやすい点が挙げられる。リスニングの後に教師の後に続いてリズムカルに音読させ、表現活動につなげたい。

4.2 1枚絵の制作

Appendix 1は、6年生10月教材 Harvest in Aomoriの1枚絵である。絵の制作は青森県内の中学校美術教師に依頼した。英文と絵のイメージ、教材の構成要件をその教員に伝え、下書きでの修正を経て完成した。この教員に依頼した理由としては、自身水彩画の画家であること、青森県内の出身者で題材に対して知識があり絵のイメージを抱きやすいと判断したことが挙げられる。

絵の内容としては、4カ所の場所と食材に加え、個性的な4人の登場人物を配し、それぞれの食材をおいしそうに食べているシーンを描いている。そして、中央では4人が車座になって座り、楽しそうに会話をしている様子を描いた。食材や登場人物の個性がよく伝わる絵で、イン

タラクションを豊富に行うことができるものと考ええる。

4.3 モデル教材の指導例

本教材の指導例を、教師の発話を中心に示す。この教材は普通の絵本に比べ1枚絵の中にある文字数が多い。それは音だけでなく文字のインプットというねらいもあるからである。よって読み聞かせをする際は、音と文字のつながりを児童に意識させるような工夫が必要である。

下記は、本教材の弘前のりんごを扱った場面を切り取ったモデルダイアログである。絵や英文を生かしながら教師からのインプットを多くして英語の理解を促し、さらに児童への問いかけを通して会話を膨らませ、やり取りを多くすることがねらいである。なお、下線部は、絵の中に書かれている表現である。

T: What's this?

Ss: Apples.

T: Good.

This is an apple.

Do you like apples?

Ss: Yes, I do.

T: Me, too.

I love apples.

What kinds of apples do you know?

Ss: Fuji, Orin, Hokuto, Sekaiichi, Shinano Sweet, and so on.

T: Yes.

There are many kinds of apples.

What kind of apple do you like?

I like Fuji.

Ss: I like Fuji, too.

I like Orin.

T: OK, what color is this apple?

Ss: Red.

T: Good.

In fall, you can see many red apples.

So Hirosaki is red. Hirosaki is famous for apples.

I usually eat one apple a day.

Do you eat apples?

Ss : Yes, I do.

I eat many apples.

T : I can eat delicious apples in fall.

You can eat delicious apples in fall.

In fall we can eat delicious apples.

※T : Teacher Ss : Students

読み聞かせにおけるやり取りの過程では、ターゲットとなる表現を繰り返し聞かせること、またそれらを自然な形で言わせること、そして児童に自分のことについて話させることが重要で、そのような活動の繰り返しにより、コミュニケーション能力や音読の基礎が育成される。このモデルダイアログを活用することによって、英語が苦手な教員でも児童と多くのインタラクションを取ることができる。

5. 成果と課題

本研究の成果としては、『We can!』の絵本型教材STORY TIMEを分析することによって、文部科学省の読み聞かせ教材の構成要件が明らかになったこと、そしてそれに基づいて青森県版のモデル教材を作成したことが挙げられる。

一方、今後教材作成に向けて、課題も大きく2つ挙げられる。1つは質の高い教材の作成である。今回モデル版を作成するにあたり、題材の精選と英文の校正にかなり時間がかかった。またその英文の内容を絵に表すのも大変な苦労があった。児童の英語力と学習意欲を高めるために、トピックの精選、英文や絵の質の保証が重要である。また、県内の児童の実態や指導の現状等を調査することも必要である。青森県の実情に合った教材を作成しなければ活用されないことも考えられる。そして、もう1つの課題は教員の指導力である。読み聞かせをする英語力、児童とインタラクションをするコミュニケーション能力が強く求められる。外国語活動が導入され10年ほど経過するが、文部科学省（2015）によると、教員対象のアンケートで挙げられた課題として「教員の指導力（51.7%）」がトップで、その次に挙げられているのが「教材・教具

の開発や準備の時間（48.7%）」である。また、「自信を持って指導している（34.6%）」、「英語が苦手である（67.3%）」等からも、いまだ英語指導に対して苦手意識を持っている教師が多い状況が明らかになっている。本教材を作成し、それを活用して授業を実践することは、小学校英語が抱える多くの課題を解決することにつながるものと考ええる。

来年度は、研究協力校にてモデル版を使って指導してもらい、教材や指導法の検証を行う。題材、英文の内容、英語の質、英文の数、単語数、英語らしさ、絵の改善点、指導上の留意点について意見を挙げてもらい、青森県版小学校英語読み聞かせ教材作成に生かしたいと考える。

（2018年11月30日受付、2019年1月10日受理）

謝 辞

本研究は、公益財団法人青森学術文化振興財団からの助成を受け、「小学校外国語科における青森県版英語リーディング教材の開発事業」として行われた。ここに関係各位に対し深く感謝の意を表する。

参考文献

- Yonaha Keiko. (2007). Introducing Okinawan culture material in English classes -Its significance and how and what to introduce. 『名桜大学総合研究(11)』. 25-35.
- 経済産業省東北経済産業局. 知的財産いいねっと.<http://www.tohoku.meti.go.jp/chizai-enet/support/brand/dakekimi.html>.
- 農林水産省. 「作況調査(果樹)」.http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/sakumotu/sakkyou_kazyu/index.html#r.
- 八戸前沖さばブランド推進協議会.<http://www.8saba.com/>.
- 樋口忠彦(代表)・加賀田哲也・泉恵美子・衣笠知子編著. (2013). 『小学校英語教育法入門』. 研究社.

弘前市. <http://www.city.hirosaki.aomori.jp/result.html?q=%E5%B6%BD%E3%81%8D%E3%81%BF>.

文部科学省.(2015).「小学校外国語活動実施状況調査」 Retrieved from http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2015/09/29/1362169_02.pdf.

文部科学省.(2017).『We can!』. Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/123/houkoku/1382162.htm.

文部科学省.(2017).『小学校学習指導要領』.

Retrieved from http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2018/05/07/1384661_4_3_2.pdf.

文部科学省.(2017).『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』 Retrieved from http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1387503.htm.

吉田敏明 (代表者). (2006).「地域英語教材 "15 Stories of Saitamaken" (Ver.2) の開発と活用 (協同研究)」. 『STEP BULLETIN vol.18』.

Appendix 1 10月の1枚絵

